

2012年7月6日

株式会社産業革新機構、
株式会社フジクラおよびNTTエレクトロニクス株式会社とともに、
ニスティカ社への出資を決定

株式会社産業革新機構（東京都千代田区丸の内 代表取締役社長：能見公一、以下「INCJ」）は、株式会社フジクラ（東京都江東区木場 取締役社長：長浜洋一）、NTTエレクトロニクス株式会社（神奈川県横浜市神奈川区新浦島町 代表取締役社長：吉村 寛）とともに、ニスティカ社へ出資することを決定いたしました。INCJはニスティカ社の株式の42%を取得します。

ニスティカ社は世界の有力な通信ネットワーク機器メーカーに ROADM（注1）の主要部品である波長選択スイッチ(WSS: Wavelength Selective Switch)を販売しています。

波長選択スイッチは ROADM 機能を実現するための不可欠な部品として、需要拡大が期待されます。ニスティカ社の波長選択スイッチ技術は、次世代の ROADM システムに要求される高度な機能を満たすことが可能であり、多くの有力な通信ネットワーク機器メーカーから高い評価を得ています。

INCJは42%を出資する株主として、社外取締役の派遣等を通じて、ニスティカ社の事業展開を支援していきます。

本件の概要については、「別添」のとおりです。

（注1）ROADM (Reconfigurable Optical Add and Drop Multiplexer)
DWDM(Dense Wavelength Division Multiplexing: 高密度波長分割多重方式)ネットワークにおいて、波長の挿入、分岐、通過を遠隔制御により行うことでネットワークの再構成を可能にするネットワーク運用技術です。大容量の光ネットワークを低コストで効率よく運用する技術として、利用拡大が進んでいます。ますます増大する通信トラフィックを処理するために、より自由度の高いネットワーク運用が可能な次世代 ROADM システムの開発が進んでおり、今後、急速に導入が進むことが予想されています。

ニスティカ社について

商号	Nistica, Inc.
設立	2005年1月
事業内容	光通信機器部品の製造、販売
本社所在地	米国ニュージャージー州ブリッジウォーター
代表者	Ashish Vengsarkar
URL	http://www.nistica.com

株式会社産業革新機構（INCJ）について

INCJは、2009年7月にオープンイノベーションの推進を通じた次世代産業の育成を目指して、法律に基づき設立された会社です。総額約2兆円の投資能力を有しており、革新性を有する事業に対し出資等を行うことで産業革新を支援することをミッションとしています。

INCJは、投資・技術・経営等で多様な経験をもつ民間人材によって運営されており、法令に基づき、当社内に設置している産業革新委員会にて、政府の定める支援基準に従って投資の可否の判断を行い、日本の産業革新に資する投資を実施いたします。

INCJでは、これまでに合計25件・総額約4000億円の投資決定を発表しました。当面、環境エネルギーにも関連するエレクトロニクスやITの分野、バイオ・ライフサイエンス分野、水ビジネス等インフラ関連分野などにおいて、知財ファンドによる先端的な基礎技術の事業展開、ベンチャー企業等の事業拡大、技術等を核とした事業の再編・統合、海外企業の買収等による積極的な海外展開などに対してハンズオン投資を行ってまいります。

(本発表資料のお問い合わせ先)

(株)産業革新機構 企画調整室 小林 檜山 望月 松島
東京都千代田区丸の内1-6-5丸の内北口ビル21・22階
電話：03-5218-7200 (大代表)

<別添>

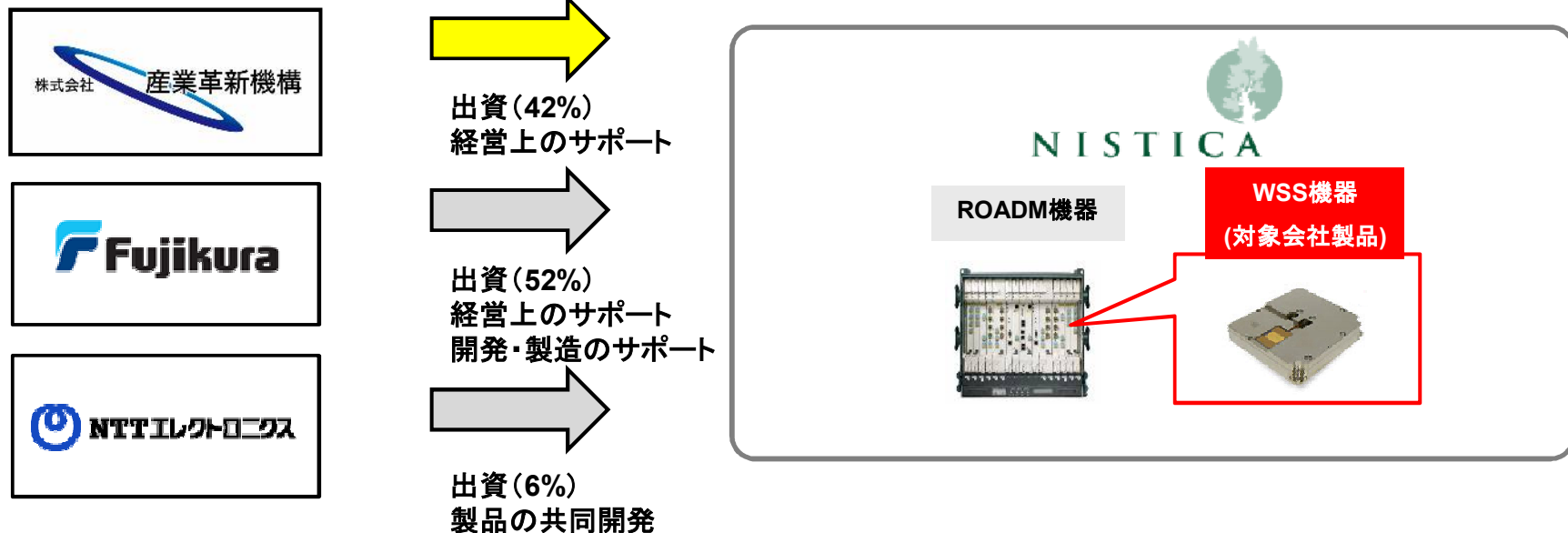
株式会社産業革新機構、株式会社フジクラおよび
NTTエレクトロニクス株式会社とともに、ニスティカ社への出資を決定



投資対象: Nistica, Inc.

事業内容: ROADM¹ の主要部品であるWSS(Wavelength Selective Switch) の開発、販売

投資金額: 非公表



光通信機器の中で重要な役割を果たす部品を開発している米国のベンチャー企業と日本の大企業による協業を通じて、増大する通信トラフィックへの対応と日本の通信機器産業の競争力の維持、強化の両立を図る

¹ ROADM: DWDM(Dense Wavelength Division Multiplexing: 高密度波長分割多重方式)ネットワークにおいて、波長の挿入、分岐、通過を遠隔制御により行うことでネットワークの再構成を可能にするネットワーク運用技術です。大容量の光ネットワークを低コストで効率よく運用する技術として、利用拡大が進んでいます。ますます増大する通信トラフィックを処理するために、より自由度の高いネットワーク運用が可能な次世代ROADMシステムの開発が進んでおり、今後、急速に導入が進むことが予想されています